

中学校歴史学習

前近代史からの平和教育

小林 朗

1 私の問題意識

今年、「韓国併合100年」「日韓基本条約45周年」「戦後65年」「安保闘争50年」にあたる年である。歴史学、歴史教育においては、「韓国併合100年」に注目して関係雑誌で特集を組んでいる。

二谷貞夫氏は「日韓関係にとつて節目の年の5月10日、『韓国併合』100年日韓知識人共同声明が東京とソウルで同時に発表された。内容は『韓国併合』が『併合にいたる過程が不義不当であり、同様に併合条約も不義不当であり、当初から無効だった』というものである。すでに、日韓の歴史学者をはじめ、韓国側が109人、日本側が105人が署名した。日韓両国

政府、国民にとつて、共同の歴史認識を確認する重要性を訴えている」と述べながらも、日韓両国の歴史認識にはまだ深い溝があり、それを埋めるために「雨森芳州の言う『誠信の交わり』をもつて、『歴史の対話』をさらに広げ、深めたい」としている（『歴史地理教育』763号 2010年8月号）。

「韓国併合100年」に、歴史教育に携わる人々が近現代史の教育実践に力を入れている。私は日本と朝鮮の関係を考えるとき、前近代史でこの関係をみていくことが近現代史へつなげる大切なことだと思つている。従来から、中学校で前近代史の朝鮮史、特に北東アジアの授業実践が少ない。

今回は、私の中学校歴史学習で「モンゴル来襲」と

「秀吉の朝鮮侵略」の授業実践を紹介しながら、日韓の歴史認識をいかに深めることができるか模索したい。この2つの実践は、中学の前近代史学習で、平和教育をねらいにしている。対外認識を求められる場合は当然、このねらいが生まれてくるのである。

2 「なぜモンゴルは負けたのか？」

(一) アジアの中の日本

中学校の歴史学習の場合、モンゴル来襲を鎌倉幕府と元とのたたかいに矮小化してしまう授業が少なくなっている。東アジアの中で動きとしてモンゴル来襲をみるのが大事である。13世紀の後半におこったモンゴル来襲は、日本にとって、本格的に外国軍の侵攻を受けた初めての体験といえる。13～14世紀の日本の歴史を刻んだ「北条得宗の専制化」「北条氏の全国的な支配」「武士団の総領制の解体」「日中禅宗界の交流」などは、どれもモンゴル来襲をぬきには語れないのである。モンゴル来襲は共通の運命にさらされたアジア諸国の動きが大切ともいえる。来襲が日本の専売特許ではない。モンゴルの世界侵略がひきおこした激動は、ビルマ（現ミャンマー）、ジャワからカラフトにいたるアジア

諸地域共通に侵略軍の撃退の課題をせおわせた。鎌倉武士だけ勇敢にたたかっていたわけではない。

朝鮮は高麗王朝であった。1196年崔氏さいが武士政権を確立した。1232年、崔政権はモンゴルの侵略を避けて江華島に移り、40年間、この島が首都になった。この高麗の戦術は水に弱いモンゴルのアキレス腱であった。モンゴルの高麗来襲は6回にも及ぶ。捕虜になったのは20万人以上、全土は「骸骨ががく、野を蔽おほう状態じょうたいで、民衆と賤民たちは抵抗を続けた。

1258年崔氏が滅亡すると、フビライの懐柔策もあり、高麗のモンゴルへの政治的従属のもとに講和がある。ところが、1270年4月、首都防衛にあたる軍隊三別抄が反乱をおこした。江華島から高麗王がフビライの意に沿うため都開京にもどったが、三別抄は従わなかった。反モンゴル救国闘争の反乱軍となった三別抄は、朝鮮半島の西南端の珍島を本拠においた。1273年にモンゴル軍に鎮圧された。この足かけ4年の反乱は、日本侵攻を大幅に遅らせる。三別抄が日本にあてて、救兵と兵糧を求めた事実がある。両民族が国境を越えて共同でモンゴルに抵抗することができ、可能性があった。現実には、日本は要請文の意味が正

確に理解されることはなかった。

サハリン、ベトナムのモンゴルへの抵抗とともに、私は朝鮮半島の高麗、三別抄のモンゴルの抵抗を授業で取りあげる。

(2) 授業実践

モンゴル来襲の授業の導入は竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』の1枚の絵画から始まる。教科書(東京書籍版)にも掲載されている「文永の役の博多鳥飼瀧のたたかい」のシーンである。この1枚の絵画で授業の半分以上を費やす。

T: 「この絵画をみて気がつくことをあつたら

言ってください。」

S: 「馬から血が出ている」

「馬に乗っている武士が大変そうだ」

「モンゴル人が弓矢を打っている」

「服装や頭の帽子みたいなものが日本人とは違う」

「ブーツを履いている」

「腰に弓矢を射れる駕籠を持っている」

「中央で花火のようなものが割れている」

T: 「モンゴル人の顔の表情はどうですか」

S: 「ひげをはやしている」

「表情が悪人のような顔になっている」

日本の前近代では外国人をみるからに嫌な人間に描くことが共通している。江戸時代のアイヌ人、ペリー来航時のペリーの顔も同じ意図で描かれている。

この絵画で教師と生徒がやりとりが終わった後、モンゴルと幕府軍の戦闘の仕方、集団戦法と一騎打ちの違いを教師が説明する。

教科書では、モンゴル帝国の成立の過程は載っているが、高麗やベトナムの抵抗は欄外の注に記載されているだけである。日本がモンゴル来襲時、「神風」で救われたのではなく、いかに南宋を含めたアジア諸民族の抵抗で切り抜けたかを中学生に認識させるのは大切といえる。

3 上杉氏はなぜ会津に移ったのか?

—秀吉政権の性格と朝鮮侵略

(1) 秀吉の朝鮮侵略

秀吉の朝鮮侵略のさなかの1598年、上杉氏は越

後から会津120万石へ転封された。越後の戦国時代がここに幕を閉じる。

豊臣秀吉は国内統合Ⅱ「天下統一統」を物無事令によつて表明し、各地域の領主間闘争を停止させた。その代りに、「唐人り」を表明して、領主層の領土欲を大陸に向け放出させる対外政策をとつた。秀吉がめざしたのは中国征服であるが、その途中にある朝鮮は対馬の属国と考えていた。

2回にわたる秀吉の無謀な朝鮮侵略が行われ、朝鮮半島が戦場に化す。中学校の歴史学習で「秀吉の朝鮮侵略」を授業する場合、他民族侵略という観点から、平和教育が最大のねらいとなる。

朝鮮では、両班（よんぱん）とよばれる地主層に率いられた朝鮮民衆の抵抗運動が高まりをみせはじめ、海上では李舜臣らの亀甲船による水軍が威力を発揮した。同時に明の救援軍が加わり、秀吉軍は敗退していく。

秀吉軍は残虐行為として、明・朝鮮軍将兵の首級のかわりに耳、鼻切りをやつて1回で1万をこす鼻の請取りもあつた。朝鮮では女性や幼児も含まれ、それらを埋める「耳塚」を設ける。さらに、秀吉軍は、2万とも3万人ともいわれる農民、職人、朱子学者らを捕

虜として日本に連行した。職人では、陶工もいて萩焼、有田焼、薩摩焼などが後に有名になる。異常な文化交流といえる。

(2) 授業実践

私の「秀吉の朝鮮侵略」の授業は3部構成で行う。

第1は藤木久志氏の「朝鮮出兵と民衆」(『日本民衆の歴史』3 三省堂)から、秀吉軍が切り取つた鼻の数を生徒に資料として提示をする。生徒は鼻を切り取つた数だということの中で中学生は生理的に受けつけない。保存するために何を秀吉軍が何を聞いたかを教師が設問する。生徒の中から、「塩で保存した」という回答が返ってくる。この導入は、生徒に「秀吉の朝鮮侵略」がどれだけ悲惨なものかを生徒に実感させる。

朝鮮では民衆、水軍の抵抗が続き、明軍も援軍を出して秀吉軍を撃退することを亀甲船の大きな絵を見せながら、教師が説明する。

第2は、上杉氏の朝鮮への渡海人数を生徒に資料として示す。秀吉による上杉氏の動員は5千人。上杉氏の正規家臣団は2千人しかいなかった。渡海人数は3千人。九州の名護屋在陣衆が2千人である。つまり、正規軍はほとんど渡海はしていなかったのである。渡

海した3千人は、藤木久志氏が述べている「傭兵」（お金で雇われる兵）ということになる。

第3は、国内でも戦争を拒否する動きがあった。欠落闘争というべきものである。越後の上田衆（六日町の坂戸を中心にした地域にいた武士団。上杉景勝の出身母体）に史料が残っている。この史料も藤木久志氏の発掘である。原文を掲載する。

一、同年（文禄元）六月、上田小臣子高村彦七郎義芳、御鎮乱以降、今般高麗御陣依袖忠勤、泉沢久秀奉之知所ママ出黒印。御鎮乱相勤候上、今度高麗御奉公申候、欠落之跡喜六二申成出之候、弥以御軍役御奉公不可有油断候也、仍如件。

天正廿年

六月十七日

高村彦七郎殿

泉沢 久秀

黒印

（注）文禄元年は1592年。

御鎮乱とは御館の乱。謙信の相続争い。高麗御陣は朝鮮侵略。

天正廿年は天正20年は1592年。

欠落の跡を御館の乱、朝鮮征伐でよく働いた家臣に領地をあげる証明である。

朝鮮侵略が国内外でも戦争に対して、反対する動きがあったことを認識させることが大切である。そのために、朝鮮と日本との関係から歴史を中学生が学習することが今こそ望まれている。

（附記）8月14日（土）にNHKテレビで放映された「日本のこれから」は今までにない日韓関係を考えさせる番組であった。日韓の若者が徹底討論する2時間45分の長時間なものである。交流に落ち着くのではなく、国家と国民は違うのだという歴史認識がきちんとあり、みている側にも新鮮な感じがした。現在でもNHKのこのHPには発言が送られて来ている。

（こ）ばやし あきら・中学校教員